第39回
シリーズ探訪・探求
訪れたいまち
宮崎県高千穂町

豊かな大自然に囲まれて 神々と共に暮らす
～高千穂～

訪れたことはなくても、この風景を見たことはあるのではないだろうか。国の名勝、天然記念物に指定されている「高千穂峡」である。太古の昔、阿蘇火山活動で大量に噴出した火砕流が五ヶ瀬川に沿って厚く堆積し、それが急激に冷却された後、長い年月をかけて再び五ヶ瀬川により浸食され、柱状の美しい懸崖なV字峡谷が形成された。

神々が降臨した舞台 高千穂

高千穂町は「日本神話」にゆかりのある地として知られており、〝神々が住む町〟と呼ばれている。太陽神である天照大神がお隠れになった「天岩戸」や、八百万の神々が集まり相談されたと伝えられる「天安河原」など数多くの神話の舞台がある。

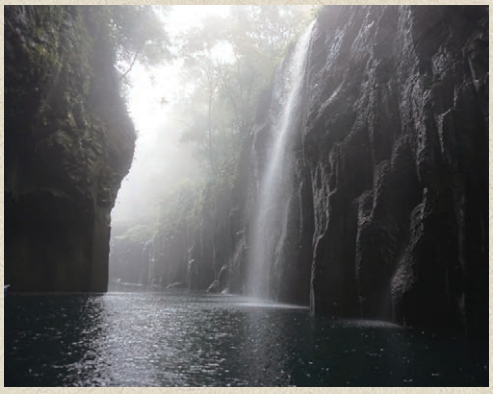
神話を伝承しながらのまちづくり

遠く古からの神話を大切に伝承しながらのまちづくりについて、高千穂町役場建設課の藤原さんは「観光客の皆さんが『来て良かった』と実感できるだけではなく、住民の一人一人が『この町に生まれ・住んで良かった』と実感し、誇りに思えるような町にしたい。神話に基づく歴史環境を活かした高千穂らしい町にしたい」と語る。

高千穂町は「おかえりなさい日本のふるさと 神都高千穂」をスローガンに、町が目指すべき目標や将来像についての取り組み方針である「高千穂町まち・ひと・しごと創生総合戦略」を平成28年2月にまとめた。また、住民のまちづくりに対する見識と関心を高めるために、有識者を招いての「高千穂まちづくりシンポジウム」の開催や、熊本県や大分県の先進的な商店街づくりとして評価の高い街への視察などを行い、住民自らが考え進める〝まちづくり〟の取り組みを積極的に行っている。

高千穂町建設課 まちづくり推進係長
藤原和也さん

ボートに乗り、真名井の滝を見上げながら大迫力の峡谷を楽しめる。



高千穂峡

晴れた日には色鮮やかな世界が広がり、雨の日には神秘的な風情が漂うなどさまざまな表情を見せてくれる。

Cafe & Buffet GOKOKU

高千穂町観光協会が運営。高千穂牛のコロッケなど高千穂の恵みを楽しめる。店内に設置している観光パンフレットは英語・中国語・韓国語版もあり、インバウンドにも対応している。

※ 人口減少や高齢化などの進行が著しい地方において、地域外の人材を積極的に受け入れ、地域ブランドや地場産品の開発・販売・PR などの地域おこしの支援や、農林水産業への従事、住民への生活支援などの「地域協力活動」を行ってもらい、その定住・定着を図ることで、地域力の創造を図ることを目的とした制度。

新風をもたらす「地域おこし協力隊」

高千穂町地域おこし協力隊
（まちづくり担当）
三ツ野寛人さん

平成28年5月に「地域おこし協力隊」※として北海道出身の三ツ野さんが高千穂町にやってきた。高千穂町のまちづくりに新風を吹き込むべく、多岐に渡る事業に携わっている。「地元の方たちが、当たり前すぎて気付いていないこの町の魅力などを再確認できるお手伝いをしたい」と語る。高千穂について尋ねると、地元住民さながらに詳細・丁寧に説明してくれた。移り住んで半年が過ぎ、地域にもうまく溶け込めていると言う。「皆さんが温かく迎えてくれて恵まれた環境です。任期中には、『よそ者』の視点を活かして私にしかできない足跡を残したいです」と三ツ野さんは何度も口にした。

潤いのある観光産業がまちづくりの活性化につながる

大自然の産物「高千穂峡」、神話と伝説のふるさととして知られる高千穂町。「観光は、まちづくりに欠かすことができません」と企画観光課の佐藤さんは言う。「平成27年3月に東九州自動車道路（大分から宮崎）が開通し、さらに4月には北方延岡道路が全線開通しました。その効果が如実に表れて、同年に高千穂町を訪れた観光客は162万人に達しました」と過去最高の観光客数に思わず笑みがこぼれた。「しかし、これからも持続して観光客の入り込みを図らなければいけません。そのために、昼間はボートで近づくことができる高千穂峡の『真名井（まない）の滝』を、夜も楽しんでいただけるようにライトアップしたり、英語・中国語・韓国語にも対応できる高千穂町問い合わせ専用ダイヤルの設置などをして、観光客数年間200万人を目指したいです。観光産業に潤いを持たせ、町がさらに活性化していければと願っています」と期待を込めて語る。

高千穂町企画観光課
観光振興係長
佐藤健次郎さん

コワーキングスペースでコミュニケーションづくり

農林業や畜産業が主産業である高千穂町は、町内での就業の選択肢が限られ

八大龍王水神社（はちだいりゅうおうすいじんじゃ）

御利益は必勝・商売繁盛。全国から会社経営者やスポーツ選手が訪れるという。

オープン前（空き店舗）

オープン後

四五二の室内

横の戸棚は可動式で、複数のスペースをつなげて広く利用することもできるように工夫されている。

四五二（しごつ）

※　高千穂地方の方言：仕事＝「しごつ」から名付けられた。

ており、就業や進学を契機に若者が町外へ流出してしまう状況に陥っていた。そんな状況を打破すべく誕生したのが、コワーキングスペース「四五二（しごつ）」※である。本事業に携わった児嶋さん（当時・企画観光課）にお話を伺った。「起業家を誘致するためには、金銭的な支援をするのではなく、働く場所や起業しやすい環境を提供することの方が大事ではないかと考えました」。そこで高千穂町の中心街にあった空き店舗を利活用して、低コストで気軽に利用できるスペース「四五二」を平成27年6月にオープン。利用者同士の交流も盛んで「先日も一年近く四五二を利用していた方が、新たに町内に移転することになり、みんなで送別会を開催しました。また、地域の方を講師に招き、毎回テーマを変えて朝活や夕活を開催するなど、働く場だけではなくコミュニケーションの場としても活用しています」と、とても嬉しそうに語った。

高千穂町農林振興課
児嶋尚憲さん
（四五二オープン時：企画観光課）

天岩戸まちづくり協議会発足

高千穂観光の中心は、高千穂峡や高千穂神社がある「三田井地区」と、天安河原や天岩戸神社がある「天岩戸地区」の二つに大きく分けられる。

天岩戸地区には、それまで住民主体のまちづくりを考える団体が四つ存在していたが、このままではまちづくりが進みにくいとの問題意識から、平成28年11月に「天岩戸まちづくり協議会」に一本化した。会長である栗原さんは「延岡市内から車で一時間ほどと交通のアクセスが良くなり便利になった反面、短時間の滞在で天岩戸地区を観光する方が増えています」と懸念する。「天岩戸神社には西本宮と東本宮がありますが、多くの観光客が訪れるのは天岩戸をお祀りする西本宮で、東本宮はあまり知られていません。天岩戸からお出になられた天照大神が、最初に住まわれた場所をお祀りする東本宮にも、ぜひ足を運んでいただきたい。そのためにも天岩戸神社西本宮・東本宮、門前通りや天安河原などの周遊ルートを整備して、観光客だ

天岩戸まちづくり協議会
会長
栗原智昭さん

天安河原

八百万の神々が相談されたと伝わる場所。祈願に訪れた人たちの手による無数の積み石が、神秘的かつ幻想的な雰囲気を一層引き立てている。

天岩戸神社 東本宮

東本宮本殿

本殿奥の御神木「七本杉」
9本に見えるが、7本根っこがつながっている。崖ぎりぎりにあり危険なため立入禁止であったが、平成26年8月に遊歩道が完成した。

けではなく住民も含めた全ての人が利用しやすい環境にしていきたいです」と熱く語る。栗原さんの天岩戸地区についての熱心な想いに引き込まれる。地元愛ゆえかと思えば、聞けば福岡県からの移住者だという。移住者だからこそ気付くこの町の課題や魅力を最大限に活かし、地元の方たちと共に大きく発展していこうとしているその姿から高千穂町の明るい未来が見えてきた。

取材日はあいにくの雨で、エメラルド色に輝く五ヶ瀬川や国見ヶ丘の雲海を拝むことはできなったが、帰路の途中、天照大神が岩戸からお出になられたかのように雲間から一条の光りが差した。それはまるで、高千穂の神々が「また、いらっしゃい」と見送ってくれたかのようだった。

天岩戸を開く勇壮な舞「戸取（ととり）の舞」

高千穂の夜神楽（よかぐら）

高千穂に伝承される神楽は、天照大神が天岩戸にお隠れになられた折りに、岩戸の前で天鈿女命（あまのうずめのみこと）が調子面白く舞ったのが始まりとされる。
毎年11月の中旬から翌年の2月上旬にかけて各村々で33番の夜神楽を奉納して、秋の実りに感謝し、翌年の豊穣を祈願する。
また、夜神楽の季節以外でも多くの方に夜神楽の文化に触れていただきたいと、夜神楽の一部を抜粋した「高千穂神楽」を高千穂神社にて毎晩公開している。（11/22・11/23のみ除く）

高千穂神社境内の神楽殿で公開される「高千穂神楽」

夫婦杉（めおとすぎ）

2本の杉の幹がくっついている。 夫婦や恋人、友人と手をつないで3回まわると縁結び・家内安全・子孫繁栄の3つの願いが叶うという。

高千穂神社

本殿

国見ヶ丘

国見ヶ丘から望む「雲海」と「朝日」の共演。
気象条件がそろった時だけ拝むことができる。
まさに雲（うん）だめし!